

宿縁

十月号

浄土真宗
本願寺派

中原寺

TEL 〇四七―三七二―〇二九二
FAX 〇四七―三七二―〇二六二

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号

教えを吾が身に ひきかけること



果が出るまでには、従来の考え方や定説とされてきたものに捉われず、地道に積み上げてきた自らの発想の転換がもたらしたものであったようです。

このたび、人類の福祉に最も具体的に貢献した人びとに贈られるノーベル賞の医学・生理学の部門で京都大学特別教授本庶佑氏が受賞したうれしいニュースがありました。がんの治療法は、長らく「手術、放射線照射、化学療法」の三本柱といわれてきましたが、四本目の柱である「免疫療法」を打ち立てました。それは、がんを攻撃する免疫のブレーキを外す新たな治療を発見したというものです。

本庶氏の話題から急に話が飛んでしましますが、「本田技研工業」の創業者本田宗一郎氏にまつわる愉快なエピソードを紹介しましょう。本田さんは、小学生のころ、自ら任ずるほどの餓鬼大将でした。それだけに、学校へ行くのが楽しくてたまらなかつたといえます。学ぶためではない、遊ぶためである。そのため、年に三日だけは、どうしても憂鬱な日を迎えなければなりません。学期はじめに通信簿を渡される日です。丙はおろか丁さえもあつたといえます。さすがの宗一郎も、これを父母に見せることはつらかつたのです。そこで一策を案じ出します。家は自転車屋です。古タイヤのチューブを切つて自ら「本田」というゴム印を作りました。これが成功して、通信簿を父母に見せることなく、自らその印を押して先生に返したからです。それだけで黙っていけばよいものを、彼はこの手を悪童どもに教えました。たのむたのむと乞われるまま、彼はみんなにそれぞれの印を作つてやつたのです。悪事はたちまち露見しました。彼らの通信簿の印がみな裏返しになっていたので「本田」には左右がないので成功しました

が他の名字には左右があつたからです。このとき、はじめて宗一郎は、ハンコの字は逆に彫られていることを知つたといえます。そして、何でも自分の手でやつて見ないとわからぬものだど悟つたといえます。

それ以来、彼は、すべてのものを自分自らの手で作つてみることにしました。それが、やがて「世界のホンダ」の二輪車、四輪車メーカーの実現となつたのです。

ここでお二人に共通するのは、常にそれまでの常識にしばられない発想と探究心であるように思います。

さて、話を仏教を学び仏を信じるといふことについて転じてみましょう。

私たち仏教徒の日頃の姿勢について、ブツダの教えは最高のさとりを説いているのだから、その教えを聞いて信じればそれでよいなどと分かりきつていようという人がいるとしたら大きな間違いです。

ブツダ釈尊の最期の教えに、

「弟子たちよ。これまでおまえたちのために説いたわたしの教えは、常に聞き、常に考え、常に修めて捨ててはならない。もし教えのとおりに行うなら常に幸いに満たされるであろう。」とあります。

これは釈尊が説かれた教えをただ聞いていなさいということではなくて、教えを自らに引きあててよく考え身を修めなさいということ。仏道を成就するには「聞・思・修」という過程が大切であるといえます。「聞(もん)」とは教えを聞くということ。「思(し)」とは聞いたことをわが身に引き当てて考えて納得することです。「修(しゅう)」とは自らの人生生活に実践し精進するといふ

ことです。

先に申したように「聞く」といっても、聞きつ放しではそれこそ右の耳から左の耳へ抜けてしまうというのでは聞いた役をなしません。親鸞聖人は『聞思』して遅慮(ちりよ)することなかれ』と述べられて、私が救われるわけを自分の身によくよく考えてみて悠長に構えてはなりませんとおっしゃっています。「聞思」とは聞いたことを自分自身の身に引き当てて考える。自分はどうなんだということを、聞いたことの証明を自分自身の体に求める。聞いて、自分はそのうはいかないという場合と、なるほどその通りだ、まさに間違いはありませんということになるわけです。それで聞いて思う。こういうあり方によつて私たちは自ずと信心の世界に入らせていただくのです。

親鸞聖人のすごいところはブツダ釈尊のあらゆる教えを徹底的に己が身に引きかけて肯づくことができるまで探究したということ。私たちがその道をわが身に深く尋ねていかなければなりません。

「歎異抄」の結びで門弟唯円さまは「親鸞聖人がつねづね仰せになつていたことですが、阿弥陀仏が五劫もの長い間思いをめぐらしてたてられた本願をよくよく考えてみると、それはただ、この親鸞一人をお救い下さるためであつた。…もつたいないことに、親鸞聖人がご自身のこととしてお話になつたのは、わたしどもが、自分の罪悪がどれほど深く重いものかも知らず、如来のご恩がどれほど高く尊いものかも知らずに、迷いの世界に沈んでいるの気づかせるためであつたのです」との言葉に、身が震撼とします。

【寺灯雑記】

○「オトブミ集く魂への囁き」を観賞
9/11

作曲家の岩代太郎さんが『音楽の新しいカタチ』として「生きる」とは如何に尊く素晴らしいことなのか」を綴った調べの演奏会が紀尾井ホールで開催されました。

このたびのステージは「オトブミ(音文)集く魂への囁き」と題した岩代さんの「作曲家として何を残したいのか」の想いから辿り着いた企画の第一段階にあたります。

この中で岩代さんから依頼を受けた三人の作文『イラン生まれの俳優でタレント、サヘルローズさんの「生まれてきたあなたへ」。平野俊興前住職の「ある ある ある」。在日コリアン2世で映画監督ヤンヨンヒさんの「18歳の君へ』の三篇が俳優の國村隼さんの朗読と東京フィルハーモニー交響楽団による弦楽オーケストラの演奏で紹介されました。作詞の依頼に応じた前住職は、岩代太郎さんの「いのちの尊さをどう伝えるか」という音楽家の意気に強く心動かされたようです。この演奏会には関心を寄せた当寺の18名のみなさんが観賞しました。

左記がその作品です。

『ある ある ある』

「さわやかな 秋の朝
短いけれど 指のない
まるい つよい手がある
何でもしてくれる
断端に骨のない」やわらかい腕もある
何でもしてくれる 短い手もある
ある ある ある
みんなある さわやかな秋の朝」

これは、「ある ある ある」と題した、中村久子さんの詩の一部です。

著者の中村久子さんは、幼くして両手両足を失いました。文中にある「断端(だんだん)」とは切除された端を意味します。

どんなに時を経ても、つらい人生を歩んだ人の言葉は胸を打ちます。

「ないこと」の不幸を恨むのではなく、

「あること」を見つけて喜ぶことが大切で仕合わせであると、教えてくれます。

両手両足がないという事実を、
「与えられた身」として生き抜いた中村久子さんを、

あの三重苦のヘレン・ケラーは、

「私より不幸な、そして偉大な人！」と讃えました。

つつい「ある」ことを忘れて

「ない」ことに心を向けてしまいます。だから落ち込んだり苦しんだりするので

す。

アナタが苦しんでいる時、心配してくれる親がいます。

アナタが悲しんでいる時、一緒に悲しんでいてくれる友達があります。

おじいちゃんもおばあちゃんもいます。必ず、必ず誰かがいることを思い出してください。

そしてアナタが楽しかったら、一緒に楽

しいと思う親がいます。

友達がいます。おじいちゃんもおばあちゃんもいます。

あなたの笑顔がみんなを仕合わせにしてくれるのです。

私たちは多くの目に見えないものによって、繋がりながら生きています。

あらゆるものに支えられ、助けられて成長して行くのです。

「ない」ことを嘆くより、

「今ある」ことに感謝できる、
そんな人になってほしいのです。

「ある ある ある」

○秋晴れの下彼岸会法要を修行

9/23

彼岸のお中日に当たる秋分の日は久しぶりからりと晴れあがって、多くの参詣者と共に彼岸会法要が厳かに勤められました。

仏説阿弥陀経が節折(せつたく)の音がリズムよく響くなかに読誦され、全員で唱和する声が境内の外にまで満ちました。

そして前住職からの法話は「なぜ浄土は西方？」と題し、「西」の字が象形文字では鳥の巣を表すことから、「いのちあるものすべてが帰る場所(帰依所)」を意味すると聞きました。しかし自然の光景を目にしなくなった現代人の生活環境では、情感が薄れ、言葉の字面だけに止まって、方便の示す味や深さを尋ねようとすることさえ難しくなっているのではないかと話されました。

【各種行事の案内】

☆第30回文化講演会

○十月二十日(土) 一時半開演

・講師：佐々木閑先生(花園大学教授)

・演題：現代人のためのブツダの教え

・場所：山崎製パン企業年金基金会館

ブツダの教えをわかり易くお話しされます。知人、友人等お誘いあわせご来場ください。

○子育てサロン(パンダっ子)

*十月九日(火) 十一時～二時

○いのちの居場所を考える会

*十月十六日(火) 十時

○和讃に学ぶ(仏智疑惑讃)

*十月二十七日(土) 二時

(十月～二月は午後二時から始めます)

○お仏具磨き清掃奉仕

*十一月三日(祝) 十時

○婦人会、壮年会合同法座

*十一月三日(祝) 一時半

(講談師田辺鶴瑛の介護講談を上映予定)

○グラウンドゴルフ(松戸金ヶ作公園)

*十一月十三日(火) 十二時始まり

(雨天の場合は十九日に順延)

○報恩講法要修行

*十一月二十日(火) 速夜五時

二十一日(水) 日中十一時、満座一時
法話：義本弘導師(大阪府)

○十月の掲示板のことば

一刻一瞬が 新しいのち

ムダにしてはならない